中央大学学員会
国立白門会ニュース

第48号
中央大学学員会
国立支部
発行者　小島泰義
042-575-1454

第三十七回　総会を迎えて

支部長　小島泰義

平成二十五年六月十六日第三十六回定時総会におきまして、支部長に選任され、早くも一年が経過いたしました。この間、会員の皆様、役員の方々からご支援、ご協力をいただき心より感謝申し上げます。

この一年間は最初に第九十回箱根駅伝予選会からのスタートでした。

事前に三多摩地区連絡協議会当番の三鷹支部の発案で多摩地区あげての応援体制を取ろうとの願いもあり、立川支部のお力添えもありまして、昭和記念公園で応援いたしました結果、十二位でかろうじて予選を通過いたしました。

また、十一月二十一日には、上野精養軒で　激励会があり、国立支部を代表して参加しました。

激励会での選手の力強い決意表明では「七位入賞を目指して頑張ります」との表明でしたが残念ながら十五位でした。次回も予選会からの出発となりますが、頑張って応援していきたいと思います。

そのほか平成二十五年度活動計画にもとづき、納涼会、学術講演会、市民まつり、ボウリング大会、クリーン多摩川、ゴルフ大会等々順調に実施され、秋の一泊旅行では、十一月二十六～二十七日に横浜ロイヤルパークホテル七十階での夜景を眺めながらのゴージャスな食事、忘れられない、素晴らしい旅行に参加でき、深い感銘を受けました。

平成二十六年度の支部の活動については国立白門会ニュース四十八号記載の通り実施していきます。会員の皆様が参加しやすい、楽しい会をめざして頑張ってまいります。

多くの皆様の参加をお願いいたします。

また、市内に存在いたします稲門会、三田会、明大会等との連携もさぐっていきたいと思います。

最後になりますが、幹事長はじめ役員の方々、会員の皆様のご支援、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成二十五年度　第三十六回　定時総会

平成二十五年度総会は梅雨空のもと六月十六日（日）午後三時より国立駅前せきやビル七階「エソラホール」で会員三十二名の出席のもと開催された。

総会にはご来賓として学員会から高嶋副会長、そして近隣支部からは斉藤小金井支部長、栗山日野支部長、出口小平支部長、山崎立川支部幹事長及び他大学からは早稲田大学国立稲門会の石井昌浩会長のご出席をいただいた。

総会では山口支部長の挨拶に続き阿部正行監事を議長に選出後、上程された第一号・第二号議案の前年度活動報告、決算報告などを一括承認し、続く第三号・第四号議案の今年度活動計画、予算案も一括承認された。引き続き第五号議案では、任期満了の役員改選について選考委員会の丸本大選考委員長から提案説明があり、支部長に小島泰義、幹事長に上田邦雄、会計に下村俊郎の各氏を選任する案が可決承認された。

議事終了後、来賓の方々からご挨拶をいただいた。今回、他大学の会長さんをご招待申しあげた石井会長さんは元国立市教育長であられ国立白門会の会員にも知人が多く、かねてから国立白門会を見学したいとのお話がありましたので今回ご招待の運びになりました。

ご挨拶のなかで国立白門会が活発に活動している事に関心をもたれ、両会の関係を深め、相互の交流を深めて行きたいとの話があった。

総会終了後の懇親会では平本聖子副幹事長の進行のもと歓談の輪が広がるなか、ご出席の支部長さんから近況報告とともに、箱根駅伝予選会には地元支部として団結して応援しようとの提案がありました。

アトラクションでは市川良夫理事のお知り会いの南米の民族音楽を演奏するグループの軽快でテンポの良い演奏に会場は大いに盛りあがり。最後は全員で校歌・応援歌を力強く歌いあげ、楽しい雰囲気の中、お開きになった。

上田　邦雄　記

「海の日」は恒例の納涼会

七月十五日（海の日）昭和記念公園バーベキューガーデンで納涼会を開催した。会員・友人二十名が集まり、炎天下、新会員の下村氏は海外生活の経験を活かして手慣れた手つきで、肉や野菜を焼き上げ、差し入れされたビール・ワイン・酒が飲み干されました。多量に残った肉を隣の若者パーティーにプレゼント。記念写真にご一緒しました。解散後、飲み足りない数名が、立川駅前の居酒屋に寄りました。

石井 孝　記

くにたち市民まつり

磯辺焼きの幟（のぼり）がお目見得

『素敵な出逢い　大学通り』と銘打った平成二十五年「くにたち市民まつり」には、十一月四日（休・月）白門会も例年通りブースを確保、会員二十三名と夫人、支援者ら三十名ほどで参加した。いまや市民まつりの名物ともなった『磯辺焼き』は、前年は新顔二組が新たに挑戦してきたが、さすがに白門会には敵わずとみたか、今回はあえなく姿を消していた。わが白門会ブースには新たに磯辺焼きの宣伝用幟二本がお目見得、ひときわ目を引いた。

用意した餅五十キロは切り餅にして約千個、即製カマドを焼き手が囲みながら東北支援の岩手切炭で焼き、海苔を巻いて三個入りケースで二百円。途中初冬の時雨に見舞われながらも午後一時半には「完売」という嬉しい新記録。また会員有志から供出された婦人用衣類、退蔵された贈答品類、毎年人気の八ヶ岳産赤唐辛子なども合わせ、販売総額は目標をはるかに上回る九万八千円を記録した。なお、開催時間中保健所の抜打ち点検を受けたが「衛生面で設備、食品の取り扱いとも完璧」とのお褒めの言葉を頂いた。

北井 治徳　記

ボーリング大会

ストライク・・・この感触を求めて九月十一日（水）恒例の親睦ボーリング大会が「立川スターレーン」（佐藤安氏のホームレーン）で精鋭十名が集合し和気あいあいと熱戦を繰り広げました。

今回は平本聖子さんが初めて参加され細腕ながら華麗なフォームでストライクを連発していました。平本さんに負けじと男性陣も頑張りますが思うようにゆかず悪戦苦闘の連続でした。

優勝は佐藤氏で日頃から鍛えた力を発揮して高スコアを出しました。参加された皆さんは久しぶりに身体を動かし、心地よい汗をかいておられたようでした。ゲーム終了後は立川市内の居酒屋で打ち上げを行い、ボーリングのスコアよりもメータを上げた会員もいました。次回は多数の会員の参加をお待ちしております。

上田 邦雄　記

箱根駅伝予選会応援

十月十九日　会場　昭和記念公園

中央大学学術講演会
「いわゆる中華思想について」
― 現代中国の拡張策の根底にあるもの ―

中央大学文学部教授　宇野茂彦 先生

昨年十月十三日、「せきやビル・エソラホール」において、中央大学主催の学術講演会が開催された。当講演会は国立市教育委員会の後援も得て、毎年開催されている。市報にも紹介され、今回も大学OB・現役学生・市民など五十名近い参加者があった。

今回は文学部教授　宇野茂彦先生をお迎えし、「いわゆる中華思想について」と題するご講演をいただいた。

中国は尖閣列島の周辺に石油の埋蔵が推測されるや、突然その領有権を主張しはじめ、現在では毎日のように我が国の領海を侵犯している。同様の事象は南シナ海でも発生している。

また、ことあるごとに我が国を批判する中国の報道官の口調、態度等をテレビで見ていると、どうしてここまで上から目線になれるのかと思うことが多々あるが、先生の講演を拝聴してその根底にあるものが理解できた。

それは先の戦争に起因する不満、怒りだけではなく、二千年以上の昔から延々と引き継がれてきた、いわゆる「中華思想」がその根底にあるというのがご講演の中核であったと思います。

中華思想とは、「自らが世界の中心にあり、その中心から同心円状に遠ざかれば遠ざかるほど、野蛮で侵略的な者たちが跋扈する文化果つる夷族の地となる。こうした世界に秩序を生み出すためには、世界の中心、すなわち文化の中心にある「優等なる中華」が周辺の「劣等なる夷族」に文化・道徳を与えて感化、訓育し、中華世界の支配下へ組み入れていくことである。」とする思想である。

この秩序への参加を受け入れない周辺諸国は夷狄（いてき）として征討の対象となる。ちなみに「夷」という文字を広辞苑で調べてみると東方の未開の異民族とでている。中国の古い文献には日本のことを東夷としている。

この思想は今日まで延々と続き、昨今の強硬な姿勢を見ると、中国にとって我が国は今でも、自分たちの意にそぐわない征討すべき東夷なのだろうか。

堀田 勲　記

新年会　すばらしい ギターの演奏に陶酔

平成二十六年新年会は、一月十九日（日）三時から、国立駅前せきやビル七階「エソラホール」で開催、会員・家族をはじめ友人・知人など三十六名が出席して行われた。

例年どおり、平本副幹事長の司会でスタートし、小島会長の挨拶、次いで上田幹事長の活動状況報告があり、山口前会長の乾杯の発声で宴会がはじまった。

宴会の料理と飲み物は、このビルのオーナーで会員の関喜一さんのご好意で豊富に揃い、みんな舌鼓を打ちながら、談笑の輪を広げた。

今年は久しぶりにビンゴゲームを行い、数字合わせに興じる笑い声や溜息が会場を沸かせた。賞品に有りつけなかった人にも、立川高島屋の美味な生菓子が袋入りで残念賞として贈られた。

「アトラクション」は、JASRAC（日本音楽著作権協会）のニューサウンズギタークラブが、コントラバス・ピッコロを交え5人編成で、ポップス・歌謡曲・ニューミュージックなど7曲、これにアンコールの呼び声でメドレー2曲を演奏し、最後に全員で「学生時代」を合唱、演奏を惜しむ万雷の拍手がつづいた。最後は、テープ演奏で、会長・幹事長の応援団マナーよろしく、中大校歌・応援歌を全員で合唱して、幕を閉じた。

〈演奏曲目〉夜明けのスキャット、ブルーライト横浜、悲しい酒、無縁坂、さよならをするために、夢去りぬ、アルハンブラの想い出、学生時代、サーカスの唄、洋画音楽メドレー（ある愛の詩、白い恋人たち、ひまわり）

市川 良夫　記

晩秋の一泊旅行

横浜

平成二十五年十一月二十六日（火）～二十七日（水）　国立白門会恒例の秋の一泊旅行、今年は例年と趣を変えて、横浜の「みなとみらい」あたりを散策し、横浜ロイヤルパークホテルで日本一の夜景を楽しもうということになりました。皆様の日頃の行いのよさでしょうか、お天気に恵まれ、一日目は現地到着後「三菱みなとみらい技術館」を見学しました。航空宇宙ゾーンでは三六〇度画面のシアターでロケットの打ち上げの感覚を体験したり、旅客機の模型の中で操縦体験もできました。環境・エネルギーゾーンでは、最先端の発電技術を学び、科学の進歩に胸がときめいて「今度は是非、孫をつれてきたい」という声もきこえました。

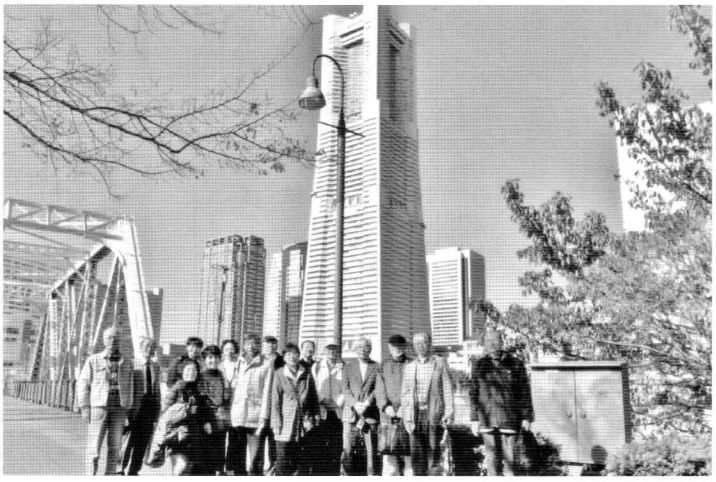
ホテルに戻り、おまちかねのディナーはランドマークタワー最上階（七〇階）のスカイラウンジでフランス料理のコースをいただきました。日本一の高層階からの見晴は格別で、東京スカイツリーと東京タワーのイルミネーションを同時に眺められたことには感動しました。ディナー後、幹事さんたちの部屋に全員集合して、飲みながらの楽しい談笑に、皆大いに盛り上がり、夜景を見ながらの横浜の夜は更けていきました。

二日目は、ホテルを後に、みなとみらいの汽車道を散歩し、横浜税関の展示室では、押収した銃、覚醒剤、偽ブランド品等に目を見張りました。

格調あるホテルニューグランドを見学し、山下公園まで足をのばしました。散策中、随所で歴史と近代化が融合したエキゾチックな横浜を肌で感じることができました。そして中華街で評判のお店での昼食後、散会となりました。

この旅行を取仕切ってくださった幹事さん、そして事前の下見、確認等にご尽力いただいた　重野さん・堀田さんに感謝申し上げます。

平本　聖子　記



地上 70 階からの美しい夜景

親睦ゴルフの件

阿部　正行

二〇一三年度は、国立白門会ゴルフ会を九月二十七日（金）に青梅ゴルフクラブで開催し、会員五名、部外者二名の参加がありました。

また、三多摩連合白門ゴルフ会を十一月二十一日（木）に山梨県の花咲カントリークラブで開催され、本来四名の団体戦でおこなわれますが、三名の会員で参加しました。

ゴルフ人口はバブル期一四〇〇万人、現在七九〇万人と言われております。石川遼、松山英樹等のプロゴルファーが出現していますが、若い二〇歳から三〇歳代のゴルファーが少なく、ゴルフ場の入場者の統計を取ると六〇歳以上のゴルファーが四割を超えている状況です。

昭和五七年に霞が関ＣＣのカナダカップで中村寅吉プロが優勝してゴルフブームになり、その後、青木功、尾崎将司、中嶋常幸プロのＡＯＮブームがおこりました。本年九月に軽井沢７２ゴルフで、世界アマチュアゴルフチーム選手権が開催。二〇一六年にブラジルのオリンピックで初めてゴルフ競技が行われます。又二〇二〇年の東京オリンピックでは、埼玉県の霞が関カントリークラブでの開催が決定しています。

しかし男子トーナメントは、最盛期三七試合ありましたが現在二四試合に減少しています。景気の低迷、スポンサーの広告宣伝費縮小やテレビの視聴率低下等が原因です。あらためてブームを起こすことは難しい状況です。高齢化社会と人口の減少に伴い、又二十年間の経済状況によりゴルフ人口が減っております。国立白門会のゴルファーも十年前は二十四名いましたが、半分以上減っている現状です。

足腰の故障や健康状態が思わしくなくゴルフをやめた人が大勢います。又新規の会員も少なく、今後五年たてば皆年老いてきます。ゴルフ会も最低四名以上、1組も集客できなければ中止せざるを得ないと思っている次第です。

（三月二〇日執筆）

俳句への一途のこころ

市橋　千鶴子（千翔）

中央大学学員会国立支部に、俳句同好会の『中桜俳句会』が立ち上げられてから、早くも満五年が間近い。石井副支部長から、『中桜俳句会年刊合同句集　初桜』第五集への、原稿要請が届けられるのも、間もなくのことであろう。

本年度学員会国立支部の副支部長の重責に加え、事務能力抜群の石井孝（孝山）氏と、同副幹事長の重責に加えて細やかな気配りの平本聖子（聖花）さんのお二人の幹事さんのお陰で、中桜俳句会の運営はまことに円滑で快よく、この五年間に会を辞められた会員は皆無である。

それどころか、当初から入会のご意向と承っていた、学員会国立支部の本年度幹事長の上田邦雄氏が、益々のご多忙のなかからご入会を決意され、俳号も（邦永）と名乗られて先月から投句を始められ、私としては、これに勝る喜びはないほど嬉しく思っている。

加えて、元東京弁護士会の「法友俳句会」でご一緒であった嶋田芙美子さんが、国立市内のわが家に最も近くにお住いであることが判明し、半年ほど前からお仲間に入られて、明るく楽しい作品を披露して下さっている。

さらに、私のせん綜合法律事務所のパートナーの高石昌子弁護士は、元々学員会本部の「中央俳句会」の原始会員でありながら、余りの忙しさから、句会には欠席が続いていたが、嶋田さんを見習って、当会の一員として俳句を愉しみ始め、私も嬉しくてたまらない。

そのことも総て、「中桜俳句会」の会員の皆様が、俳句という座の文芸の醍醐味を会得され、それを実践される優れた資質を持たれていたことに他ならないと、有難く思っている。

当初、私の体調の優れない期間を、会員のみで句座を営み、各自が真剣に学習した結果の意見を交換しつゝ、その成果を得て、僅か五年という短かい時間のうちに、各々秀句を得るに至ったことは、私としてはこれ以上の喜びはなく、むしろ私自身会員の皆様にお礼を言いたい気持でいっぱいである。

俳句の実作と指導を、晩年の生甲斐としている私にとって、「中桜俳句会」の会員の皆様との出会いは本当に倖せであった。

この機会に会員の皆様の、この一年間の作品のうち、最も秀句と思う一句を選び、ご本人の同意のもとに多少の選評を付して披露申し上げ、それをもって本稿の責を果させて頂くこととする（五十音順）。

泥鰌鍋汗を拭ひて冷酒酌む　石井　孝山

一句のうちに、泥鰌鍋、汗、冷酒と夏の季語が目白押し、加えて拭う、酌むの動詞が二つも五、七、五の一七音に見事に納まっている。三つの季語が暑さのなかの熱さ、涼しさの相乗効果をうまく引出し、句を見て誰しも、今にも「どぜう」の暖簾を潜りたくなるであろう、と思われるまでの秀品である。

実朝忌幾星霜の石畳　上田　邦永

鎌倉幕府の三代将軍源実朝が、甥公卿の兇刃に倒れたのは、承久元年（一二一九）、右大臣拝賀式に臨んだあと、鶴岡八幡宮の石段の大銀杏の傍らであった。その一部始終を目撃していながら、八百年の長きに亘り、黙して語らぬ石畳を主役に置いて、二十七歳の若さで生涯を終えた実朝の死を悼む、優れた忌俳句である。

星月夜混迷深む座標軸　北井　治徳

鳥でさえ、渡りに際しては、太陽や月、星座等を座標軸として、目的地への方向を定めている。片や、日本国家に於いては、領有権を始め、国際関係の座標軸さえ定めかねており、渡り鳥にも劣る現状を、国民として案じられてならない、との時事俳句の名人ならではの、愛国心迸らんばかりの秀句。治徳氏の並外れた感性や博識には敬服の外ない。

健やかなれと願ふはひとつ去年今年　嶋田　芙美子

作者は四年前に、最愛のご主人を見送られ、いまは愛犬との二人暮らし？。幸いお子方は全員都内居住で、お孫さんも数名居られて、始終、訪ねたり訪ねられたりして賑やかなご日常。就中、ピアノも歌も並外れてお上手な女のお孫様が、コーラスを趣味とされる作者にとっては可愛くてたまらない。年頭に当っては、皆の健康を祈るや切との秀句。

家元の初能は翁去年今年　白石　紀之字

謡曲の観世流においては、例年大晦日のうちから準備を始め、万端整ったところで元旦の午前零時に、山王の日枝神社奥殿におい家元が単独で「翁」の初能を演じられる。これを「一人翁」と稱するが、まさに去年から今年への移行は瞬時の間であって、高浜虚子は、これを「貫く棒のごときもの」と詠んだ。作者は『観世』の版元に、五十年勤務され、いまも家元直々の稽古を受けておられる謡の達人。

保育園の送迎亡父（ちち）の遅日かな　高石　昌子

超一流企業の副社長として、社会的には万を数える部下を従えた父上が、定年で退職されてからは、お孫さん達を毎日保育園に送り迎えして下さった。そのお孫さん方も、早くも大学生や社会人となり、お孫さん達を毎日保育園に送り迎えして下さった。そのお孫さん方も、早くも大学生や社会人となり、既に亡くなられた祖父様を折りに触れて懐かしんでいる。

お陰で、作者も、毎日のように予定に入っていた、午前十時開廷の法廷に間に合い、今だに父上のご恩が忘れ難くて、心に泛んだ一句。

内裏雛飾りて手酌大吟醸
田野倉　訓郎

幼稚園のときからご一緒であったという、仲のよいご夫妻ということで評判であった、その一方を見送られ、来月は三回忌を迎えようとされている作者。とても雛を飾る気にはなれず、辛うじて内裏雛のみを飾り、妻在りし日の賑やかであった雛祭りを、ひとり盃を傾けながら偲んでいるという。妻の遺言により俳句を始められた作者の、胸の奥からら迸り出た妻恋の秀吟。

長じたる子と酌み交わす春の燭
二宮　虚空

東日本大震災から、早くも萬三年が過ぎた。新聞に発表されていた、被害者の若者の追悼記事のなかで、昨年漸く成年に達したが、津波で死亡した父と、せめて生前酒を酌み交わして、成人を祝って欲しかったとの切なる声に、若し反対の立場であったなら、より切実な心境であろうと推察した。作者は、父子共に健全なうちに念願を達成することができ、さぞかし酒の席の春の燭は明るく、かつ華やかであったことであろう。これも作者ご夫妻の、熱心な遍路による信仰心への、佛のご加護に外ならないと思われる。

母笑顔薄氷（うすらひ）ほどの安堵かな
平本　聖花

作者の父上は、ご生前内務省に勤務されていた高級官僚であられたが、惜しくも三十年前に他界された。母上も以前国立市の教育委員を務められており、作者も長年、母校中央大学において、藤本哲也教授の秘書として尽されたご一家。いまは母子二人の、信頼し切ったご日常ながら、作者は、母上のご体調はじめ生活のすべての点の過不足を、母上の笑顔によって判定するという、心優しい作者ならではの秀句。

夕映えの奈良の甍や暮遅し
藤村　雲閑

作者も、一流企業を支えてこられたお立場で、退職後テニスを始め、種々のご趣味を愉しんでおられたが、俳句は中桜俳句会に参加されて以来とのことである。ところが、兼題として出された季語に対する研究は徹底しておられ、屡々その成果を私に対し、または句会の席上発表して下さり、そのご熱意には頭の下るばかりである。

俳句では、句に一つの季語を置く定めで、その季語が俳句に生命を與え、季語は句の魂としての存在となる。この句での、「暮遅し」は、日の暮れの遅くなった感じの季語「遅日」の傍題。奈良の寺院の屋根や塔が、夕霞に靄ったなかに、柔らかい夕日に映えて何時までも暮れ残っている、その春ならではの古都の情緒を、惜しみなく詠った名吟である。

雪洞やもの言ひたげな雛の貌
藤村　憲子

作者は藤村雲閑氏夫人、テニスも俳句もご夫妻共に愉しまれる、この上なく羨しいご夫妻である。但し、俳句の方は、憲子さんの方はお若いうちから短歌と共に、多少嗜んでおられたのではと推察できるほどに、作句の姿勢が、極く自然体で滑らかでおいでになり、作句に辛吟されるご主人と対照的である。私も幼ない頃、家族が寝静まった後、雪洞に灯が点り飾られている雛達が段から降りて団欒が始まるのではないかと、就寝前に雛達のお顔を、しげしげと眺めたものであった。正しく同感の作品である。

散り落つる人生のさまや姫椿
丸本　雄大

作者は、今年度学員会国立支部副支部長の重責に加え、国立市の数々の事業に、大学を代表してボランティアとして参加され、寧日ない日々を過されているなかから、昨今めきめき腕を上げられ、一同の目を瞠るような秀句を披露されるようになった。

昨今、各界で活躍しておられる方々が、年齢とは別に、急に病を得て、惜しまれながら逝去されることが相次ぎ、歳月と共に自然に忘れられてゆく浮世の倣いの果無さを、可憐な姫椿に託した見事な作品である。俳歴僅か五年のひとの作品とは信じられないほどの名吟で、ご本人にも増して　私の喜びは大である。

選句をしていて、通常感ずることのひとつに、当会の会員の作品の特徴は、ものごとの着眼がよいということである。

最后に当って、凡そ方とある句会において、合同句集を毎年上梓している句会は僅少と思われ、そのなかに『中央俳壇年刊合同句集　薫風』と『中桜俳句会年刊合同句集　初桜』とがあり、法科の大学と稱される母校にあっての文学面での実績は、驚くばかりである。

その発想は当会に於ける年刊合同句集の上梓のことも、折角の俳句の指導の諸々を、各人の記憶として残すだけでは勿体ない、最初から合同句集の形で残しては、との研究熱心な藤村雲閑氏の発案に依るものであると聞き及ぶ。

さらに年間各自二十句の作品の募集要項作りを始め、出句の集配の雑務は石井孝山氏、例年炎暑、酷暑のなかを、合同句集全文の配列、印字化の一切を北井治徳氏、和綴じの優雅な製本の一切を白石紀之字氏が各々担当され、十一月例会の席上において、各自に十冊宛配布される運びの見事さは、驚嘆するばかりである。

これも、俳句への一途のこころの、然らしむるところと思い、俳縁の深さに、ただ只感謝の念を捧げ、最后に当り、来る四月十二日に九十四回目の誕生日を迎えるわが身のこころとして、会員の皆様に、つぎのささやかな一句をお届けしたい。

己（ひとよ）が一生の花野賑しくありしかな
市橋　千翔

中央俳句会二十周年俳句大会に於いて会員北井治徳氏が
最優秀賞を受賞された

このたび、中央大学学員会が後援する中央俳句会（当会顧問の市橋千鶴子氏が名誉会長）が、創立二十周年の記念事業として、付属中学、高校、大学、学員、教職員および家族に至る、いわばオール中央大学を対象にした俳句の募集が行われ、応募総数五千二百句の中から、選者三名が各自優秀句一句、秀逸句五句、佳作十句を選出し、さらに優秀句三句のなかから最優秀句一句が選出された。その最優秀句に国立白門会・中桜俳句会会員の北井治徳氏の、次の一句が選ばれました。

会釈して追ひ抜く少女小鳥来る　北井　治徳

四月二十六日午後三時に、記念大会の式典は、来賓として、学長 福原紀彦先生、理事長 足立直樹先生、学員会会長 久野修慈先生、故石原八束夫人 石原英子様その他多勢ご出席のもとに、駿河台記念館に於いて盛大に催され、中央俳句会会長 長沼ひろ志氏より、先ずご懇篤なるご挨拶ならびに各人に賞状が授与され、一同緊張のなかにも晴れがましいひと時であった。

選者のうち、市橋千翔先生は、都合により急の欠席となったので、先ずは大高霧海先生、次いで水見壽男先生から、時間をかけての選評のお言葉を頂き、会はますます盛り上がった。

北井氏は、会の終わりに、受賞者を代表して挨拶をするように前以って依頼されていたので、さぞかし気が気でない思いをされたと思われるのに、流石に、立派な挨拶を落着いて述べられ、その内容も実に堂々たるものであった。

氏の話によると、今でも継続しておられる毎朝の五乃至十キロのジョギングは、三十数年前の在米銀行ご勤務の頃の、激務に起因する肥満、生活習慣病への反省から始められたもので、今では体重は七十キロを切り、二十代に戻るにはもう一息とのこと。

昨年秋のある日、両手に合計一キロのダンベルを持って、狭い裏道を走っていた最中に、後ろに人の気配を感じたので、ダンベルの手を下ろして道を空けたところ、氏の孫娘ぐらいの少女が会釈して通り過ぎて云った、その瞬間の爽やかな感動に詩心を覚え、「小鳥くる」という秋の季語（渡り鳥の傍題）を配して、一句を得られたということであった。

昨今は、朝のジョギングに女性の参加は珍しくないが、中学生ぐらいの少女となると極めて珍しく、しかも礼儀正しく会釈して追い抜いていった、溌剌とした少女の後ろ姿の爽やかさに、先ずは作者が感動して句がたち上がり、選者三人がそれを最優秀句と認められて表彰された。

幸い、私の句も秀逸に選ばれていたので、次に記させて頂く。

六月や濡れて艶めく岩鏡　石井 孝山

国立白門会に市橋顧問指導による俳句同好会「中桜俳句会」が創立されて五年。市橋千翔先生の薫陶を受け、今回めでたく表彰された。

（石井 孝）

「国立まと火」
実行計画について

来年は、クリーン多摩川国立の三十周年を迎えます。この記念行事として、多摩川河川敷で実施可能なイベントとして、「国立まと火」の採用を企画しています。

これは、平成十七年迄続いていた、国立、合川児童交流会が北秋田市として合併した為、交流が中断している合川町の伝統行事で、春彼岸の中日に行われる、各部落の墓地やお寺での「まと火」と、夏には全部落合同で河川敷でのお盆の十三日に実施される「大まと火」があります。先祖の霊を迎える供養と共に、豊年満作、家内安全を祈る習慣が行われています。

この灯の球は、木綿の布地を芯として、球状にまるめ、成型して、針金で吊るしたもので、灯油に浸して、点火するものです。

恒例になっている国立市の正月に実施している「どんど焼」のイベントに対して、夏のお盆時に「国立まと火」として、イベント化して、夏の風物行事として、継続して実施し、多摩川が市民の癒しの場になればと考えています。

この球状の「ダンポ」作りには、大勢の人の手作り品となるため、多くの人の協力が必要です。今年は、前夜祭として、実験的に実施して、市民にアピールしたいと考えています。

クリーン多摩川国立実行委員会だけでなく、多くの市民のご協力と賛同が必要です。このため「国立まと火」実行委員会を立ち上げて、開催実現の為の各団体や有志の方々に呼びかけ、協賛を頂き、実現に向けて努力する所存です。

国立白門会の皆様にも是非ご協力を頂きますようお願い申し上げます。

「国立まと火」実施委員
丸本　大

秋田県・合川町　「まと火」　26・3・21撮影

歴史発見の旅（宮崎）

古事記に学ぶ神話物語

重野和夫

宮崎県には「高千穂」をはじめ古事記に書かれた「神話の世界」があり、国産み神話から天孫降臨、神武天皇が登場する物語まで神々の舞台が広がっている。日本最古の書「古事記」の中に身を置いて、遥か古代に想いをはせること、それは「素晴らしい感動、尽きないロマン」といえるのではないか。

古事記が書かれた背景と太安万侶（おおのやすまろ）の苦心

現地でいただいた宮崎県の観光案内書に『はるかな古代への入り口が、街角のあちこちに、ひっそりと扉を開けて待っています。神話をめぐる小さな旅に出かけましょう』の文字が、強く心を引きつけた。特に『ひっそりと扉を開けて・・・』の何とも魅惑的表現が行動を駆りたてた。

自分の不確かな古事記についての記憶をたどると同時に、あらためて現代訳何編かを通読して面白さに惹かれることになってしまった。

古事記は、皇位継承をめぐる争いの壬申の乱（六七二年）に勝利した天武天皇が、二八歳、頭脳明敏な稗田阿礼（ひえだのあれ）に、自ら指導して皇室の系譜、祖先の伝承の内容を記憶させた。後の元明天皇が七一二年に学者官僚の太安万侶（おおのやすまろ）に編纂を命じた日本最古の天皇家の系譜の書である。

古事記の研究者達は、古事記は、純然たる歴史書でも神話・伝説を集めた文芸書でもなく、政治学、法学、宗教学、民俗学等にも深く関わっているという。

まったく日本人の世界観・精神・社会観さらに生活の規範・風習などアイデンティティが感じられ同感である。

さらに時代背景を考えると、白鳳文化の花開く六四五年の大化の改新から七一〇年の平城京遷都までの、飛鳥時代の貴族文化華やかな時代だったと言える。一方対外的には、六六三年の自村江（はくすきのえ）の戦いで百済を支援した日本軍が、唐、新羅の連合軍に大敗した。その結果、強力な唐の大軍が、いつ攻めてきてもおかしくないという状況であった。

「唐の正史」によって、唐の皇帝が支配する正当性を確立したことを参考にして、日本でも天武天皇が中央集権の君主をめざすために、歴史書が必要と考えたことは理解出来る。

壬申の乱後、遣唐使や留学生が持ち帰った大陸文化を、日本の風土にあったように作り替えたのであるが、そこには、漢字という外国文字で日本文化・言語を伝達することが如何に困難であったかを太安万侶は序文で告白している。

漢字の意味で表現すると、日本語の意味がかくれてしまう。漢字の字音だけ借りて表現すると、字数が多くなる。いずれにしても、文章の意味を正しく伝えられない。そこで、一句の中に漢字の音と訓を交えて使い、誤解が生じない場合は漢字の訓で表わす。文や語の意味・読みがわかりにくいときは、注を施すなどして大変苦労している。たとえば、次のようである。

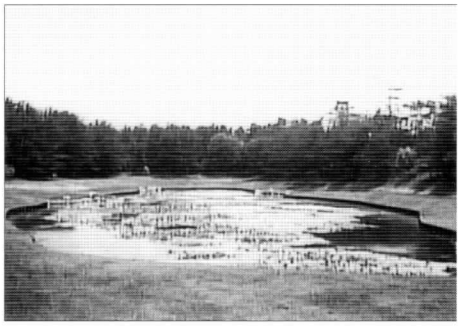
・国稚如浮脂而（くにわかくうかべるあぶらのごとくして）
・久羅下那洲多陀用弊流（くらげなすただよえる）
・赤加賀知（あかがち）八俣の大蛇の目。注をつけて赤がちというのは酸漿（ほほづき）なり。

古事記の内容は、神話を豊に取り入れて、物語性の高い作品になっている。さらに、天皇家統治の正当性を確かにするため、第三十三代推古天皇の事跡にいたるまで書かれている。このことから古事記は、天皇家中心の「朝廷の公式の歴史」と位置づけられている。その後、唐の律令制にならって大宝律令が出来、天皇を頂点とした貴族、官僚の中央集権国家が成立することになる。この頃、高松塚古墳の壁画が描かれ、額田王、柿本人麻呂が登場している。

国造り・天照大御神（あまてらすおおみかみ）と天石屋戸（あめのいしやど）

天地創造をする時、最初の神様は天之御中主神（あめのみなかぬしのかみ）他2柱。さらに5柱の神が生まれ、最後に男女の性を持つ、男神の伊邪那岐命（いざなぎのみこと）、女神の伊邪那美命（いざなみのみこと）が現れた。実に人間的な「聖なる結婚」によって、日本の国土が次々出来た。

その神々が、ダイナミックに活躍する物語は、神秘的でありロマンに充ちている。特に不思議に感じたことは、天の岩戸神社はじめ神々が登場し、活躍した場所が宮崎県下に神社として、数多く現存していることである。また、理由ある伝承地、故地に遺跡、遺構、古墳が景観とともに残されている。



みそぎ池

古事記の「みそぎ」の記述では、伊邪那岐命（いざなぎのみこと）は亡くなった妻を追って、黄泉の国（よみのくに）を訪ねるが、恐ろしい目にあって戻り、汚れた身を阿波岐原で「みそぎ」をする。顔を洗った時、女性で母の如く温情のある太陽の神、そして高天原（天上界の神聖な空間）の支配者である天照大御神（あまてらすおおみかみ）が誕生した。さらに月読命（つきよみのみこと）と八岐大蛇を退治した須佐之男命（すさのおのみこと）の3柱が誕生する。

平和でおだやかな高天原に、弟の荒ぶる神・須佐之男命（すさのおのみこと）が来て、機織り小屋に馬を投げ込んだりして、死者が出てしまう。嘆き悲しんだ天照大御神（あまてらすおおみかみ）は、天石屋戸（天岩戸）に引きこもってしまったので、天地四方は昼夜の区別がつかない真っ暗闇になってしまった。その結果、あらゆる災

いが起こってしまった。

困った八百萬神（やおよろずのかみ）は、天石屋戸の上流約三〇〇メートルにある岩戸川に面した大きな洞窟の天安河原（あめのやすがわら）に集まって、天照大御神が天石屋戸から出てくるための対策を練った。古事記は、この場面を次のように述べている。

天石屋戸の近くで、多くの長鳴鳥を鳴かせ、周囲に賢木（さかき）を立て、それに八咫鏡（やたのかがみ）と八尺の勾玉の珠を取り付け、下枝に神に捧げる絹布の白和幣（あいらにきて）・青和幣（あおのきて）を垂らし、周囲には神々が集まって、大きな絹の布を持ったり、神聖な祝詞を唱えていた。天石屋戸の脇には天手力男（あめのたじからお）の神が隠れ立っている。

陽気な天宇受売命（あめのうずめのみこと）の姿は、天香久山の天の日影を棒（たすき）にかけ、真折りの蔦をカツラにして、天香久山の笹の葉を束ね手持つ。天照大御神がお隠れになった天石屋戸前で、伏せた桶の上に立って足を踏みならす。神憑りの尋常とは思えない狂信的な踊りで、胸乳をさらけ出し、裳の紐を恥部に垂らしてしまったので、高天原が鳴り響き、八百萬の神々は、その光景を見て一斉に大笑いした。

【原文】　於天之石屋戸状汗気蹈登抒呂許志　為神懸而　掛出胸乳裳緒忍垂於番登也　爾高天原動而八百萬神共咲

天照大御神は、不思議に思い天石屋戸を細めに開けて、「私が隠れていて、高天原は暗く闇であるのに、どうして天宇受売命（あめのうずめのみこと）が舞い、八百萬神が笑っているのか」といった。そこで、天宇受売命が「あなた様にも勝っている神がいるので、喜び笑っている」といって鏡を取り出して、天照大御神に見せた。天照大御神は不思議に思って、身を乗り出したところを、天手力男（あめのたじからお）の神が、天照大御神のお手を引いて、引きずり出した。

この結果、高天原（たかまがはら）の天上界も、葦原中国（あしはらのなかつくに）つまり地上界も明るくなった。

天手力男（あめのたじからお）像

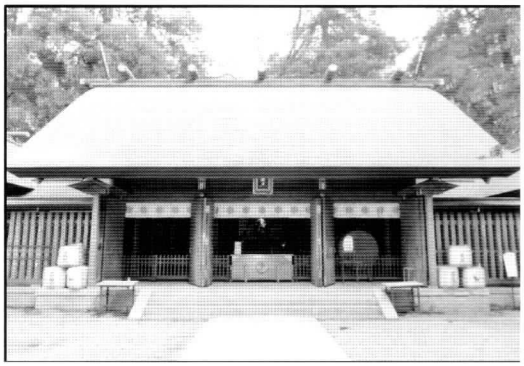
その後、須佐之男命（すさのおのみこと）は、天照大御神の言うこともきかず黄泉の国へ行きたいなどと云うので、天照大御神は激怒して、高天原から天神の資格剥奪して追放してしまった。

このあと須佐之男命は、出雲国（いずものくに）で八岐大蛇を退治し、さらに六世の子孫に大国主命（おおくにぬしのみこと）現れて、白兎（しろうさぎ）物語、国譲り伝説が誕生することになる。以上が古事記上巻の一部である。

天岩戸神社（あめのいわどじんじゃ）
天安河原（あめのやすがわら）

神々が、人間に近い「宴」という仕草で、太陽の神を陽気に誘い出すのが面白い。さらに、この物語を「岩戸神楽」として、宮崎県に数多く伝承されているのも一見に値する。

高千穂町の天岩戸神社の、社務所でいただいた天岩戸神社略記の御由緒には、『古事記、日本書紀に、皇祖天照皇大神は、御弟素盞嗚尊（おんおとうとすさのおのみこと）を御避け遊ばして、暫く天岩戸へ御寵もり遊ばされた事を記して居りますが、当神社は其の霊跡天岩戸を奉る神社です。』と書かれていた。



天岩戸神社　西本宮

大きな菊の御紋がひときわ光る西本宮の社殿、その裏側は、岩戸川を挟んで天岩戸の神域で、ご神体となっていた。

ご神体である天岩戸は、一般に拝見することは出来ず残念であった。天岩戸や天宇受売命が踊り、神々が集会した場所を想像するしかなかった。

それならばと天岩戸の上流にある天安河原へ行き、誰もいない洞窟内に一人佇んで、ゆっくりと周囲を観察することが出来た。

天安河原を斜めに射す光

天安河原は、岩戸川の渓谷に開いた間口四〇m奥行き三〇mの大洞窟だ。洞窟内の鳥居の奥に小さな社が安置されていた。この洞窟と小さな渓谷に八百萬の神々は、どのように参集したのだろうか、ここでも想像を逞しくして、周囲をゆっくり見渡してみた。

折しも西に傾いた太陽が、幾筋かの光の帯となって、天安河原、洞窟を斜めに射していた。その光景は、今まさに天岩戸が開かれ、神憑りの中に天照大御神なる太陽の神が現れたような、神秘的で、何とも不思議な錯覚の中に身を置くこととなってしまった。

観光案内書に書かれていた「古代への入り口が、ひっそりと扉を開けて待っています」の言葉が、現実味を帯び

てきたのである。どうやら古事記へのタイムトンネルに入り込んでしまったようだ

日本人の宗教観

宮崎には、古事記に登場する神々が今も健在であることがわかった。さらに、日本人の日々の生活の中に八百萬の神々が健在でいらっしゃる。

狐のお稲荷、武将をあがめる東照宮、学者を尊願する天満宮、戦死者を祀る靖国神社等々に神が祀られている。そして、新年の初詣、結婚、七五三、宮参りなどの慶事、祭りごとに神々が息づいている。

また、神は身近な心の中にいて、畏敬の念や能力・徳を持って感動すれば人間はおろか、自然そして石・木・水・火だって神様になれる。八百萬の神々を信仰する多神教の世界では、厳しい教典はなく、どれだけ多くの神々を信仰の対象としても、神のお咎めはない。日本人の宗教観は、今後も簡単に変わることはないだろう。

しかし、伊勢、出雲、奈良をはじめとして、日本全国には約八万の神々の神社がある。そこには、誰を祀っているのだろうか。ご神体、その縁起、由緒などを知って参拝する人が、どれほどいるのか大変気がかりである。神々があまり多くて、特別考える事が少ないのかもしれない。しかし、古事記と日本書紀合わせると、三二七柱の神々が登場すると云われる。八百萬の神々には遠く及ばない。八百萬の神とは、「それほど多い」と解釈すれば、記紀の中の多様な神々を知ることで、確かな光明を与えてくれる筈である。

これと比べて、一神教のキリスト教、イスラム教、ユダヤ教は、唯一絶対の創造神（God）を信仰している。その神は、教典で他の神を信仰することを禁じているものもある。そのような人々には、八百萬の神々などを、どのように理解するのか、興味のあるところである。

「掛まくも畏き伊邪那岐大神筑紫日向の橘の小戸の阿波岐原に・・・」は、神主の有り難い祓詞。筑紫は九州、日向は宮崎、橘、小戸神社、阿波岐原は宮崎県に現存する。阿波岐原には、伊邪那岐命（いざなぎのみこと）、伊邪那美命（いざなみのみこと）を祀る江田神社やみそぎ池がある。

我が家の神棚の御神札には、「天照皇大神宮」が鎮座奉って、我が家の家内安全を祈願し応えてくれている。

古事記の伝承地を念頭に、古事記を通読すると、太古（古墳時代～弥生時代）の日本の姿が、生き生きと目の前に浮かび上がってくる。今後、「天つ神」と「国つ神」の婚姻で結ばれた山幸彦、海幸彦の青島。伝承神楽。そして日向を出て、大国主命（おおくにぬしのみこと）が活躍した出雲神話へ。さらに、日向の美々津を出た神武東征の大和、倭姫命（やまとひめのみこと）の伊勢へ。神話物語の旅は、はてしなく広がって、旅心をも醸成し続ける。

【参考】　古事記では天照大御神、日本書紀では天照皇大神といい、共に太陽を神格化した神。皇室の祖神、日本民族の総氏神とされている。

余談だが、「日向カボチャ」と「いもがらぼくと」について

高千穂で、「神代庵」という蕎麦粉一〇〇%で打つ、うまい蕎麦屋を見つけて入った。そこに宮崎・熊本地方での無料情報誌、「みちくさ」のカメラマン二人がいた。彼らは、「もり蕎麦」をテーブルにおいて、情報誌に掲載する写真を撮影中だった。蕎麦屋の高齢の主人は、客が来てから蕎麦打ちをするので時間がかかった。その間カメラマンに、「日向カボチャといもがらぼくと」の歌について聞いてみた。

「うん知ってるよ。若い人は余り歌わないが、神武天皇が東征するとき、美々津の港から日向の強い男と、綺麗な美人を連れて行ってしまったんだ。だから強い男と美人は、宮崎にはいないよ」と微笑を浮かべ、素っ気ない言葉が返ってきた。

「いもがらぼくと」は、芋の茎で作った木刀のこと。気立ての良い日向男の代名詞。「日向カボチャ」は、小ぶりで派手さはないが、おいしさは最高のカボチャ。気立ての優しい働き者の日向女を表している。

宮崎のイメージソング「いもがらぼくと」の歌のことを、いちど宮崎県の人に聞いてみたかったのである。自分には、親切で優しい宮崎県の人々の姿が、強く脳裏に残っている。

歌「いもがらぼくと」について

昭和二九年、宮崎市制三〇周年を記念して、市が公募によって歌詞を募集して作詞、作曲したものである。

歌　「いもがらぼくと」

作詞　小野金次郎
作曲　小澤直与志

一
腰の痛さよ　山畑開き
春は霞の日の長さ
焼酎五合の　寝酒の杓に
おれも嫁女がほしゅなった　ヤレ
もろたもろたよ　いもがらぼくと
日向カボチヤの　よか嫁女
ジャガ　ジャガ　マコッチ　エレコッチャ

二
鞍に菜の花　ヒャラヒャラヒャット
七つ浦から　赤毛布
可愛い嫁女は　シャンシャン馬よ
今年や田植えも　二人連れ　ヤレ
もろたもろたよ　いもがらぼくと
日向カボチヤの　よか嫁女
ジャガ　ジャガ　マコッチ　エレコッチャ

参考資料「古事記　武田友宏著　角川文庫
「古事記　古川則弘著　人物往来社
現代語訳「日本書紀」福永武彦著
河出書房
宮崎県観光資料　等

かるがもの行進

田口正明

初夏の早朝のことである。見ればわたくしの家の前の道を、軽鴨親子が、隊列をくんで行進しているではないか。

お母さん鳥を先頭に、チビ鳥があとにつづく。母親は数歩すすんでは、後ろをふりかえる。ハグレチビ鳥がいないことを確認するとまたピーピーと鳴いて行進を再開する。

このまま進んで、大学どおりに出ると、車に跳ねられて死んでしまう。心配でならない。以前、一ツ橋時計台前

の池で、チビ鳥が生まれた。珍しさのあまり、守衛さんたちが餌場をつくったり、餌をあたえたり、過保護に育てられた。上野のパンダの出産と同じだ。このため車社会に順応できず、元気に巣立ったのは少なかったようだ。

お母さん鳥は、大学どおりは危険きわまりないことを十分知っている。このため、佐野書院の森へ消え失せた。これで軽鴨のユウモアにみちた行進が見られないのは、残念である。また来年のお楽しみに、わが家の古巣に帰還と相成った。

最近、子育て放棄や児童虐待の暗いニュースを見かける。教育上ゆゆしき問題である。法務省は全国の自治体に呼びかけ「社会を明るくする運動」を展開している。あの微笑ましい軽鴨親子の行進を見れば、人の命がいかに大切かが、よくお解りになることと思う。

さきほど軽鴨の親鳥が、ピーピーと鳴くともうしあげた。ほんとうは、ガアガアといった声で、地上でも大空でもよく鳴く。鴨の字を分解すると、甲鳥になる。甲の字には一番とか優れているという意味がある。人間から見たとき、軽鴨の優れている点は、食べて美味しいことだ。またカモには「カモにする」「いいカモだ」という言い方がある。食べて美味しいことから、古の時代より餌食にするという意味があったようだ。今でも蕎麦屋のメニューには鴨南蛮が根強い人気をあつめている。カモは古より人びとに愛されてきた。次のような俳句も登場した。

春雨や食われ残りの鴨が鳴く（一茶）

佐保川に賀茂の毛捨てるゆうべかな（蕪村）

田口正明

四国遍路

二宮　巍

私は以前、この紙面に四国遍路記を寄稿してから十二年が経ちました。平成十四年に初めて歩き遍路をしてから、歩く事の楽しさ、辛さ、まさに「人生遍路なり」を身を以って体験させて貰いました。以降毎年のように、歩き遍路を中心にバス遍路、逆打ち遍路等を織り交ぜて十二回四国を廻らせて頂いています。その間四国を四回廻ると取得可能な「先達」の資格も取り、先達として東京から幾人かの人もご案内して四国を廻りました。

昨年十二月一日に家内と歩き遍路の途中で、泊った宿の主人から徳島新聞から取材をさせて貰いたいと申し入れがあり、OKをしたら早速次の日二十番鶴林寺への登り道で記者と落ち合い取材を受けました。

その後、二十一番大龍寺・二十二番平等寺・二十三番薬王寺と廻って帰って来ました。途中薬王寺への道には「俳句の小道」と名付けられ五メートル間隔で各地の応募者からの句碑が建てられています。

今年は一月～二月　二十三番薬王寺～三十二番禅師峰寺、二月～三月四十番観自在寺～五十九番国分寺まで廻って来ました。この旅で最後は霊場会主催の『お大師さまと歩む四国遍路』と銘打って、「四国遍路千二百」の記念行事の一環として行われている歩きで、弘法大師の像を先頭に八十人が連れだって歩くと云う行事に参加しました。

既に昨年の二月に香川県の善通寺を出発して、徳島県・高知県・愛媛県と区切り打ちで、この三月七日・八日で延命寺～国分寺まで廻ったものです。最後はまたこの五月八日に七四番甲山寺から七五番善通寺へと戻り、大法要が行われます。それにも参加の予定をしております。そんな事でかれこれ十二回お遍路を廻らせて頂きました。これからも多分機会があったら遍路行脚を続ける事でしょう。

米国ボクシング最大手興行主ボブアラム氏と再会を歓ぶ

去る八月二十五日、有明コロシアムに於いて行われた、今、話題の村田選手（ロンドンオリンピックでミドル級の金メダリスト）のプロデビュー戦を観に行って来た。

観戦に行ったのには、もう一つの目的があった。それは世界の金メダリストとの契約を兼ねて来日していた米国最大手のトップランク社のボブアラム氏との再会を果たしたかったからだ。今から三十一年前、私が未だ若かりし頃、東京体育館で世界J・ミドル級タイトルマッチを興行した際、フジテレビ局の局長から依頼され、アラム氏の為に特別席をリングサイドに用意したのだった。

実は二年前、ラスベガスのMGMで行われた西岡選手の防衛戦（トップランク社のプロモーター）を観戦に行ったのだが、あまりの会場の広さの為、残念ながら彼に逢う事が出来ないまま帰国したのだった。それ故、今回の再会はお互いにとって大きな喜びとなった。二人共、初老（アラム氏八十二才、私七十八才）となったが通訳を介し、お互いの若さを褒め合い励まし合っての楽しいひと時であった。

試合の結果は新聞一面で掲載され、TVでも放映された通りである。

国分寺サイトーボクシングジム
斎藤　寛

ロンドンオリンピック金メダリスト村田選手と契約をする、
アメリカトップランクのボブ・アラム氏と記念撮影
H25年8月25日　有明コロシアムリングサイドにて

平成25年度　国立白門会決算書

自 平成25年4月1日　至 平成26年3月31日　単位:円

収入の部			支出の部		
科目	決算	予算	科目	決算	予算
年会費	186,000	240,000	印刷費	83,700	100,000
総会会費	124,000	150,000	総会費	191,730	200,000
行事活動特別収入	198,850	50,000	事業活動費	86,500	50,000
寄付・祝金	105,500	100,000	親睦行事費	140,817	200,000
学術講演会支部活動強化費	350,000	300,000	通信費	52,585	50,000
			会議費	30,050	30,000
雑収入	3,024		事務用品費	12,543	30,000
前年度繰越金	205,101	205,101	学術講演会開催費	278,960	300,000
			雑費	14,480	10,000
			予備費		75,101
			次年度繰越金	281,110	
合計	1,172,475	1,045,101	合計	1,172,475	1,045,101

平成26年4月25日

会計　下村俊郎　印

会計監事　二宮巍　印

平成26年度　国立白門会予算案

自 平成26年4月1日　至 平成27年3月31日　単位:円

収入の部			支出の部		
科目	摘要	金額	科目	摘要	金額
年会費	3000円×65	195,000	印刷費	白門会ニュース	100,000
総会会費	4000円×30	120,000	総会費		200,000
入	さくら祭、市民祭	160,000	事業活動費	近隣支部総会祝金	100,000
寄付、祝金		60,000	親睦行事費	納涼会・新年会他	200,000
学術講演会	大学より補助	200,000	通信費	会員連絡他	50,000
			会議費	役員会他	35,000
			事務用品費		20,000
前年度繰越金		281,110	学術講演会開催費		250,000
			雑費		15,000
			予備費		46,110
合計		1,016,110	合計		1,016,110

平成25年度活動報告　25・4・1～26・3・31

- ＊ 4/ 7(日)　「さくらフェスティバル」雨天出展中止
- ＊ 6/16(日)　第36回定時総会「せきやホール」
- ＊ 7/15(月・祝)　納涼会「昭和記念公園」バーベキュー
- ＊ 9/11(水)　ボーリング会「立川スターレーン」
- ＊ 9/27(金)　ゴルフ会「青梅C・C」
- ＊ 9/29(日)　「くにたちウオーキング」
- ＊ 10/13(日)　学術講演会「せきやホール」
- ＊ 10/19(土)　箱根駅伝予選会応援
- ＊ 10/27(日)　ホームカミングデー(台風の為中止
- ＊ 11/ 3(日)　「くにたち市民まつり」に参加
- ＊ 11/17(日)　秋のクリーン多摩川
- ＊ 11/21(木)　三多摩地区ゴルフ大会参加
- ＊ 11/26(火)　秋の一泊旅行（横浜）
- ＊ 1/19(日)　新年会「せきやホール」
- ＊ 2/ 2(日)　三多摩地区囲碁大会参加
- ＊ 3/16(日)　春のクリーン多摩川
- ○ 白門会ニュース47号発行
- ○ 俳句同好会「中桜俳句会」毎月一回開催

平成26年度活動計画案　26・4・1～27・3・31

- ＊ 4/ 6(日)　「さくらフェスティバル」
- ＊ 6/15(日)　第36回定時総会「せきやホール」
- ＊ 7/21(月・祝)　納涼会「昭和記念公園」バーベキュー
- ＊ 9/ 8(月)　ゴルフコンペ（詳細未定）
- ＊ 9/17(水)　ボーリング会「立川スターレーン」
- ＊ 10/13(月・祝)　体育の日「くにたちウオーキング」
- ＊ 10/19(日)　中大学術講演会「せきやホール」
- ＊ 10/26(日)　ホームカミングデー
- ＊ 11/ 3(月)　「くにたち市民まつり」に参加
- ＊ 11/　秋の一泊旅行（詳細未定）
- ＊ 11/16(日)　秋のクリーン多摩川
- ＊ 1/18(日)　新年会
- ＊ 3/15(日)　春のクリーン多摩川
- ○ 白門会ニュース48号発行